慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	慶應義塾における文化人類学の研究と教育
Sub Title	Why do people give alms to beggars? : the interaction of "begging-alms" in post-Soviet Uzbekistan
Author	鈴木, 正崇(Suzuki, Masataka)
Publisher	三田社会学会
Publication year	2009
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.14 (2009.) ,p.58- 70
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	慶應義塾150 年記念講演会 : 慶應義塾の社会学 : 回顧と展望
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20090000-0058

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

三田社会学第 14 号（2009）

慶應義塾における文化人類学の研究と教育

鈴木　正崇

０．はじめに

日本では文化人類学を専門に養成する大学や研究機関は極めて限られており、将来的にも同じ状況が続くと見られる。総じて、文化人類学関連の研究者は、大学では多くの専攻に拡散しているが、慶應義塾でも同様の状況が続いてきた。大学の制度において確固たる位置付けのない文化人類学に関して、慶應義塾ではどのような形で研究や教育が行われてきたか、今後はどのような方向性を目指すべきかを検討する。

１．人類学事始め

慶應義塾での文化人類学の研究は、戦前の史学科での人類学や民族学、国文学専攻の民俗学や芸能史の研究に源流が求められ、戦後は多くの専攻に跨って研究者を輩出した。文化人類学 cultural anthropology の呼称はアメリカの学問の影響で戦後になって一般化したもので、最近まではドイツやフランスの学風を受けて民族学 ethnology と呼ばれ、現在でも併用されることが多い。日本民族学会は 1934 年（昭和 9）に設立されたが、2004 年に日本文化人類学会と改称した。日本では柳田國男の下で独自の日本文化研究を展開してきた民俗学 folklore があり、民族学は主として海外との比較研究を行う学問とされてきた。以下では、研究の黎明期に遡り、現在に至る経緯や特色を概観する。

慶應義塾での初めての人類学の講義は、1919 年（大正 8）に文学部史学科（1910 年創設）の講師となった移川子之蔵（1884－1947）によるものであった。移川はハーバート大学大学院で人類学（民族学）を専攻し博士学位をとって、神話学や文化史を主体に研究していた。1928（昭和 3）に台北帝国大学教授となって、「土俗人種学講座」を担当し、1930 年から 1933 年まで集中的に台湾原住民の調査研究に取り組み、1936 年（昭和 11）に編纂して刊行した『台湾高砂族系統所属の研究』（1935）で帝国学士院賞を受賞した。台湾研究で成果を上げたが、馬渕東一や国分直一などの人類学者を育てると共に、医学部解剖学の教授として赴任した金関丈夫と協力して台湾全土での民族学的調査を行った。慶應義塾で移川の講義を聞いて感銘を受けて、後に台湾に赴いた宮本延人（1901－1988）は、移川の助手として原住民研究を行った。

柳田國男（1875－1962）は、1920 年（大正 9）7 月 1 日三田史学会で「Folklore の範囲について」と題して講演し、同年には３回（9・11・12 月）にわたって「民俗学」の講義を行った。日本の大学で民俗学が講じられたのはこれが初めてであると思われる。柳田は、1924 年（大正 13）4 月 22 日には慶應義塾大学文学部講師となり、毎週１回、史学科で「民間伝承」

を講義した（1929 年（昭和 4）3 月まで）。柳田國男と慶應義塾との関係は、1917 年（大正 6）に当時文学科在学中の松本信廣（1897－1981）が柳田邸を訪問して山岳会での講演を依頼し（題名「山民の生活」）、その後に師事したことに始まる。松本は 1920 年に岩手県遠野の佐々木喜善宅を訪問し、柳田國男と現地で合流して一緒に三陸海岸を旅した（柳田國男『雪国の春』1928）。人類学・民俗学の講義と連動して、1924 年には慶應義塾による初めての発掘調査が子安池谷貝塚でおこなわれた。当時の人類学は考古学と連携して歴史の復元を主眼とした。

史学科のうち、東洋史専攻には伝統的に文化人類学（民族学）や民俗学に関心を持つ者が多く集まった。その基礎を築いたのは松本信廣である。松本は移川子之蔵の人類学の講義を聞き中国古代のトーテミズムについて卒業論文を書いた。1924 年パリのソルボンヌ大学に留学して、『贈与論』（1924）を著わした民族学者のマルセル・モースや、『古代支那の祭祀と歌謡』（1922）などで知られる中国古代研究者のマルセル・グラネに師事すると共に、東洋学を広く渉猟した。博士論文の主論文は『日本語とオーストロアジア語』、副論文は訪欧中の移川子之蔵の教唆で執筆した『日本神話の研究』で、1928 年に学位を受けて帰国し慶應義塾の助教授となった（1930 年教授）。その後は、フランス社会学を基礎に西南中国と東南アジアを視野に入れた南方世界との比較へと乗り出した。柳田國男や折口信夫など民俗学者と広く交流し、神話学・民族学・民俗学・考古学を関連付けて、中国の江南の文化や少数民族、インドシナなどの南方地域の文化と日本の基層文化を比較し、日本文化の系統論の研究を推し進めた。主な論文は『東亜民族文化論攷』（1968）、『日本民族文化の起源』全 3 巻（1978）に収録された。

文学部史学科出身で日本古代史を専門とした松本芳夫（1893－1982）は民俗学・人類学・考古学などに興味をもち、松本信廣と共に 1921 年（大正 10）に「地人会」をつくって共同研究を行ない、柳田國男の指導を受けた。1919 年に史学科を卒業して教職につき、1928 年 9 月に欧米に留学、1933 年文学部教授となり、この間、通信教育部長、文学部長を歴任し、1964 年に退職して名誉教授となった。和歌山県東牟婁郡下里村の生まれで、故郷の民俗に関して『熊野民謡集』（1922）と『熊野民俗記』（1943）を著した。

-

２．文化人類学の教育研究組織上の位置づけ

（１）文学部

文学部での文化人類学の研究･教育は、専任者が様々な専攻に分散して所属して行っており、単独の専攻コースはない。研究者は、社会学、人間科学、東洋史、民族学考古学の４つの専攻と諸言語（朝鮮語、スペイン語）に分かれ、相互の連携は個別に行われている。主な研究者として、鈴木正崇・樫尾直樹（社会学）、宮坂敬造・北中淳子（人間科学）、吉原和男（東洋史）、野村伸一（朝鮮語）、山口徹（民族学考古学）がいる。

①社会学専攻 http://www.flet.keio.ac.jp/dep/socio.html

社会学専攻は、実質的には社会学・社会心理学・文化人類学の３つに分かれ、社会学を基軸としながらも広い視野から人間を考える視野を養うことを目的とする。

文化人類学の流れは、東北大学から転入してきた石津照璽（1903-1972）の宗教社会学に始まる。石津は宗教哲学の研究から出発して、宗教の存在論的根拠を人間の基礎的な構造に求め、文化人類学や社会学を解釈上の枠組みとする実証的な研究を展開し、東北の巫女のイタコの研究も行った。その後、文学部社会学卒業後、東京大学大学院で宗教学を学んだ宮家準（1933－）が着任して、宗教社会学や宗教民俗学の立場から日本の民俗宗教、特に修験道の研究を展開し、文化人類学の手法を取り込んだ研究を行った。日本各地の霊山や祭祀芸能の調査研究を組織し、大学院生を組織して研究の方向性を明確化した。吉田禎吾（1923－）は東京大学教授を定年後、客員教授に迎えられ（1983－1988）、社会人類学も取り込みつつ、宗教人類学を主体として研究・教育を行った。吉田は農村や漁村の機能主義に基づく社会人類学の研究から、インドネシアのバリやメキシコのチアパスをフィールドとする宗教人類学へと展開した。慶應義塾でも和歌山県や新潟県などで調査を行い学生の指導にあたった。定年時に刊行された論文集、吉田禎吾・宮家準編『コスモスと社会―宗教人類学の諸相―』（慶應通信、1988）はその成果である。

現在では鈴木正崇が文化人類学概論と比較文化論を担当している。鈴木は 1986 年に慶應義塾に着任したが、大学院文学研究科東洋史専攻の出身で、松本信廣、伊藤清司、可児弘明の薫陶を受けて民族学、特に民俗宗教を主体として、中国南部の少数民族や日本との比較研究へと入った。合わせて宮家準から宗教民俗学、池田弥三郎から芸能史を学んだ。博士課程終了後、東京工業大学工学部人文社会群の文化人類学研究室で岩田慶治の助手を務め、スリランカやインド、中国の少数民族の調査や研究に取り組むことになった。樫尾直樹は東京大学大学院人文科学研究科で島薗進に師事して、宗教学・宗教社会学を学び、早稲田大学と東京外国語大学で助手を務め、1999 年に着任した。主にスピリチュアリティの研究を行っている。こうして宗教学や宗教民俗学から宗教人類学に至る分野を主体とする慶應義塾での文化人類学の方向性が定まった。

②人間科学専攻 http://www.flet.keio.ac.jp/dep/human.html

人間科学は 1981 年に社会学・心理学・教育学からスタッフを移動して独立した専攻で、客員教授となった荻野恒一（1921－1991）の文化精神医学の講義が開設されて以来、文化人類学を取り込むようになった。荻野は医療人類学の研究も行った。現在では、宮坂敬造が文化人類学を担当して、医療人類学や比較精神医学を講じ、アートやパフォーマンスの研究もあわせ行っている。宮坂は東京大学大学院教育学研究科で教育心理学や文化人類学を学んだ後に、大阪大学文化人類学研究室で青木保の下で助手を務め、1986 年に着任した。象徴的コミュニケーションや多文化社会の芸能と医療などの研究を行っている。ゼミでは石井達朗（理工学部）が演劇学やジェンダー論を担当していた（2008 年度迄）。2004 年に医療人類学を専門とする北中淳子が着任した。北中はシカゴ大学社会科学研究科修士課程（文化人類学・文化心理学専攻）を経て、マッギル大学医療社会研究学部で博士学位を取得した。人間科学専攻では、今後も医療人類学を主体とした研究が継続すると見られる。

③東洋史学専攻 http://www.flet.keio.ac.jp/dep/ahist.html

戦後の松本信廣は東洋史に所属したが、千葉県九十九里浜の漁民の調査を組織して、社会と神話、更には考古学を結びつけようと試みた。古代丸木舟の研究は国史の清水潤三、稲作の起源や縄文の土偶の研究は江坂輝弥によって受け継がれた。また三笠宮崇仁が主宰した「新嘗の会」で農耕儀礼の比較研究も推進し、その成果は、にひなめ研究会編『新嘗の研究』全５輯として刊行されている（1953－1955、1978）。大きな仕事としては、1954 年に日本民族学会設立 20 周年の記念事業として文部省や民間会社の援助で財団法人日本民族学協会が行った『第一次東南アジア稲作民族文化綜合調査団』を組織して団長となり、ベトナム、カンボジア、ラオス、タイの４ヶ国で現地調査（1957 年 8 月から約 8 ケ月）を実施したことで、慶應義塾からは清水潤三、江坂輝弥が参加し、調査団からは岩田慶治、綾部恒雄などの人類学者が輩出した。日本民族学協会は日本文化人類学会の前身で当時は協会の中で学会運営がなされていた（1964 年改組）。ベトナムの歴史研究にも先鞭をつけ、歴史書『大南寔録』の翻刻（全 20 巻＋目録＋地名索引。1961－1981）にも力を注いだ。松本の研究は宗教や神話が主体で、フランス社会学の方法を応用した文化史の方法をとっていたので、史学だけでなく、社会学・人類学・国文学・民俗学との交流の場を作り出した。

伊藤清司（1924－2007）は松本信廣のもとで学び、口頭伝承を中心として日中比較の神話学や中国の少数民族研究の研究を展開し、ソロモン諸島レンネル島や中国大陸でのフィールドワークも行った。可児弘明（1932－）は鵜飼の民俗学的研究から出発し、香港の水上居民（蛋民）の現地調査、香港の人身売買の歴史的考察、台湾やシンガポールでの民間信仰の研究、華僑の社会史へと展開した。近森正（1935－）は当初は東洋史に所属して、ベトナムの銅鼓やカンボジアの生業の研究を行っていたが、その後オセアニア考古学へ転じて、ソロモン諸島やクック諸島での環境と人間の関わりを重視した文化史を研究し、1979 年に民族学・考古学専攻に移動した。現在のスタッフでは、山本英史は明清史の専門であるが、中国各地の地域社会の歴史を通じて民衆の動きを捉えようとしている。吉原和男は中国南部の潮州人の民俗宗教である徳教の研究を行い、東南アジアの華僑・華人社会との比較研究や、移民・移動の研究を行っている。桐本東太は中国古代史の専門だが、民俗学や神話学の成果も取り込んでいる。

なお、イスラーム文化史や東西交渉史の研究で知られる前嶋信次（1903－1983）は、1951 年に文学部に着任し、1971 年に定年を迎えて名誉教授となったが、戦前は台湾での民俗学的研究を行い、『民俗台湾』に関与して、王爺信仰について先駆的業績を残している。経歴は、山梨県生まれ、東京外国語大学仏語科、東京帝国大学文学部卒業後、台南第一中学校教諭となり、台北帝国大学助手を経て、南満州鉄道東亜経済調査局に勤めた。戦後は、日本イスラム協会、日本オリエント学会の設立に尽力した。著作には、『アラビアの医術』（1965）や『東西文化交流の諸相』（1971）など、訳書にはイブン・バットゥータ『三大陸周遊記』や『アラビアンナイト』があり、民族学に繋がる研究も多い。前嶋の薫陶を受けた坂本勉は、イスラーム巡礼研究やトルコの近代史などで成果を挙げている。また、東西交渉史で知られる家島彦一（外国語大学）やインド・ベンガルの民衆文化や歴史研究の臼田雅之（東海大学）も前嶋の門下であっ

た。イスラーム研究では、東京外国語大学定年後に移ってきた三木亘がおり、イスラームの医学や医術、薬屋などの社会史を研究して、新風を吹き込んだ。三木は網野善彦との親交もあり、三田史学会で歴史学のあり方をめぐって共同シンポジウムを開催したこともある。網野は中世史家であるが民俗学への造詣も深く、宮本常一と交流があり、日本常民文化研究所での活動にも参加しており、神奈川大学への移転にあたって尽力した。

④民族学考古学専攻 http://www.flet.keio.ac.jp/dep/aande.html

1979 年に、西洋史・東洋史・日本史からスタッフを移動して民族学考古学が専攻として独立し、オセアニアの考古学と文化史を研究する近森正や、ミトラス教の研究を行っていた小川英雄（1935－）はここに所属した。縄文の考古学が専門の鈴木公雄（1938－2004）は江戸時代の六道銭の研究も行った。日本史所属の清水潤三（1894－1982）、東洋史所属の江坂輝弥（1919－）が協力する体制をとった。民族学は都市人類学の中村孚美が担当し、祭礼を主体とした人間関係の研究を行った。その後はソロモン諸島やクック諸島などをフィールドとする社会人類学が専門の棚橋訓が担当した（2001 年 4 月に東京都立大学に転出）。2004 年 4 月からオセアニア考古学と文化史を専門とする山口徹が民族学の講義を行っている。山口は大学院修士課程修了後、ニュージーランドのオークランド大学に学んで博士学位を取得し、千葉商科大学政策情報学部を経て 2004 年に着任した。現在では、民族学よりも考古学への傾斜を強めている。

⑤国文学専攻 http://www.flet.keio.ac.jp/dep/jlit.html

国文学には民俗学の影響が強く、主軸は國学院大学と兼担で慶應義塾の教授となった折口信夫（1887－1953）の芸能史や古代研究によって形成された。折口信夫は 1923（大正 12）5 月 26 日付で文学部講師となり、「国文学演習」を担当し、1928 年（昭和 3）に教授になった。亡くなる 1953 年（昭和 28）までほぼ 30 年間にわたり慶應義塾と深い縁を持ったことになる。慶應義塾は國學院と並ぶ折口信夫の研究教育の二大中心地であった。折口の学統は池田弥三郎（1914－1982）によって芸能史研究として堅持され、国文学の解釈に民俗学の手法を導入し、各地の調査を試みるなどユニークな研究が展開した。その学問は、西村亨に受け継がれ、フィールドとして琉球に関心を寄せる者も輩出した。芸能史の講義は、現在は野村伸一が担当している。野村は韓国朝鮮での祭祀芸能を中心に、琉球・中国も含め広く東アジアの民俗・芸能・演劇に関してフィールドワークを行い、社会学専攻ではゼミを担当してアジア研究を進めている。西村亨編『折口信夫事典』（大修館書店、1988。新版 1998）は慶應義塾の研究者を主体とする成果で、『折口信夫全集』[新版]（中央公論新社、1995～）の編集には池田門下の井口樹生を初め、多くの国文学出身の研究者が参画した。池田門下の仲井幸二郎は三隅治雄らと共に『日本民謡辞典』（1972）を編集した。慶應高校の皆川隆一は台湾のヤミ族、伊藤好英は韓国の芸能の調査を続けている。大学では藤原茂樹が万葉集の民俗、石川透が奈良絵本や本地物を専門にしているが、折口学の影響は弱まりつつある。折口信夫は言霊論などを通じて井筒俊彦（1914－1993．イスラーム学）や西脇順三郎（1894－1982．詩人、英文学）にも大きな影響を与えた。また、写真家の芳賀日出男は中国文学の出身で、折口信夫に師事し国文学研究者

と交流があり、民俗写真の領域を開拓して民俗学の普及に貢献した。国文学出身の今野圓輔（こんのえんすけ）（1914－1982）は、折口信夫に師事し、後に柳田國男門下となり、毎日新聞社、東京教育大学講師を経て、聖学院短期大学教授を務め、『檜枝岐民俗誌』（1951）、『馬娘婚姻譚』（1956）などの著作がある。

1921 年（大正 10）に国文学を中心に地人会が発足し、柳田國男・折口信夫をはじめ著名な民俗学者の講演や発表を行ってきた。ちなみに、同年に三田綱町の澁澤邸にアチック・ミューゼアム・ソサエティ（後の日本常民文化研究所）が開設されている。戦後は池田弥三郎や西村亨を中心として運営され、民俗学や文化人類学に関心を持つ者が専攻や学部生、院生を問わずに参加していたが、現在は中断している。柳田國男も 1960 年 10 月に「島々の話」という講演をしている。なお、2005 年から「折口信夫・池田弥三郎記念講演会」を毎年 1 回 10 月頃に開催する企画が始まった。

⑥日本史専攻・西洋史専攻・英米文学専攻・仏文学専攻・中国文学専攻

日本史では松本信廣の調査に関連して、清水潤三が考古学の立場から古代丸木舟の研究を行った。中井信彦（1916－1990）は、近世の商業や職人の研究が専門であったが、社会史の研究方法論として歴史学と民俗学の融合を目指し、独自の柳田國男論を展開した。日本史から人文地理学に転じた西岡秀雄（1913－）は、民俗学の観点を入れて性神の史的研究を行った。.現在のスタッフでは、古代史の三宅和朗が神社の研究を行い、史料に基づいて祭祀の変化や実態解明にあたっており、民俗学への関心もある。近世史の柳田利夫は、日系人など移民研究を主体としてペルーなど海外との交渉史の研究を進めてきた。西洋史の山道佳子はスペインの近現代の都市や祭礼の歴史的研究を行っている。

文学関係では、英米文学では西脇順三郎が古代・中世の考察に関連して、英国留学中にフレーザーを初めとする西欧の人類学・民俗学の影響を受け、帰国後は柳田國男・折口信夫・松本信廣などとも交流した。言語文化研究所に柳田國男から方言関係資料を寄贈されたのはその縁による。その門下の由良君美は文芸批評を取り込みつつ記号論の紹介を行った。唐須教光は言語人類学の専門で、文化記号論の造詣も深い。仏文学では、名誉教授の松原秀一が東西説話の比較で知られている。中国文学では奥野信太郎が怪談や説話に興味を持ち民俗学にも強い関心を持っていた。

（2）法学部・経済学部・総合政策学部・環境情報学部・理工学部その他

法学部では政治学科に社会学や地域研究の研究者がおり、アフリカ、インドネシア、オーストラリアの政治や社会の研究が行われ、民族問題も取り上げられている。十時厳周の産業人類学、小田英郎のアフリカ地域研究が先駆となった。柳田國男や柳宗悦の影響を受けた有賀喜左衛門（1897－1979）が慶應義塾で教鞭をとり、農村社会学や家族親族論への関心を持続させた。有賀が組織した諏訪の真志野での共同調査は大きな影響を与え、大淵英雄や平野敏政などは民俗学や人類学を摂り込んだ農村社会学・家族社会学を展開した。調査に関連しては、社会学専

攻の佐原六郎による月島・佃島調査が行われ、都市人類学の先駆とも言える。現在のスタッフとして、関根政美がオーストラリアを中心とする地域研究、有末賢は都市民俗学・地域社会学・生活史などを専門に研究している。法学部には 2005 年度から、文化人類学を専門として、グアテマラの織物を中心に研究している本谷裕子（スペイン語）が加わった。文学部に有期の助教授として所属していた禅野美帆（スペイン語）もメキシコの都市・農村関係を主体とする研究を行っていたが、関西学院大学に転出した。

経済学部では社会史の分野に研究者が集まっていて、地域研究を通じて人類学と連携している。主な研究者として、インドネシアの植民地研究の倉沢愛子、ラテン・アメリカの地域研究を進める清水透、インド経済史の神田さやこがおり、共同研究も行われている。日吉所属の鈴木晃仁は医療の社会史や身体文化論の研究を行い、工藤多香子はキューバの民俗文化を専門とし、中国の伝統演劇・芸能、特に皮影戯（影絵人形芝居）の研究で知られる千田（ちだ）大介がいる。

湘南藤沢キャンパス（SFC）の総合政策学部では、野村亨がマレーシアの言語や地域研究、小熊英二がナショナリズムや近代日本の民族形成の考察を行っている。環境情報学部では奥出直人がアメリカ南部生活史研究、渡辺靖がアメリカ都市の人類学的研究、山本純一がメキシコ・チアパスの地域研究を進めている。矢上台キャンパスの理工学部のスタッフとしては、演劇やパフォーマンス研究の石井達朗、言語人類学・認識人類学を専攻する井上京子が講座を担当している。メディア・コミュニケーション研究所では、イギリス移民研究やカルチュラル・スタディーズの小川葉子がゼミを担当している。

（3）大学院社会学研究科 http://www.flet.keio.ac.jp/grads/index.html

大学院の社会学研究科は 1951 年に創設され、当初から学部を越えて幅広い調査研究を進めることを目的とした。基盤は文学部・法学部・経済学部であるが、学生は経済学部、商学部、法学部、文学部、環境情報学部、総合政策学部からも受け入れ、他の大学からも広く学生が集まる。履修科目は、修士課程は文化人類学演習・同学説演習・同特論・同学説特論、民俗学演習・同特論、歴史民俗学演習・同特論、社会史特論と同演習、博士課程では文化人類学特殊演習と同特殊研究、歴史民俗学特殊演習と同特殊研究、社会史特殊研究と同特殊演習がある。メディアコミュニケーション研究所、東アジア研究所（旧地域研究センター）、言語文化研究所とも関わり、兼担している教員も多い。社会学だけでなく、政治学、文学、経済学などとの自由な交流の下に研究出来ることが特色である。

また、2007 年度からは、グローバル COE「論理と感性の先端的教育研究拠点形成」が採用され、「人文グローバル COE プログラム哲学・文化人類学研究会」（宮坂敬造・北中淳子担当 http://www.carls.keio.ac.jp）が随時、シンポジウム、ワークショップ、研究会を開催し、大学院の講義にプロジェクト科目が設定されている。

2008 年度の文化人類学・民俗学関係の担当者は、鈴木正崇、宮坂敬造、樫尾直樹、有末賢、関根政美、清水透、倉沢愛子、非常勤講師は和崎春日、中西裕二である。外国人による講座と

しては、2007 年度はルイ・ビュトン講座が開講されてアンヌ・ブッシイ Anne Bouchy（宗教民俗学。フランス国立極東学院）の集中講義が行われた。集中講義は 2007 年度はアラン・ヤング Alan Young（医療人類学。スタンフォード大学）、2008 年度にはローレンス・カーマイヤーLaurence J. Kirmayer（医療人類学。マッギル大学）が担当した。過去の大学院の授業担当者には、松本信廣、中井信彦、櫻井徳太郎、鈴木孝夫、吉田禎吾、佐々木宏幹、末成道男、上田将、浜本満、真島一郎、白川琢磨、宮田登、藤井正雄、福田アジオ、松園万亀男、波平恵美子、阿部年晴、小松和彦、中牧弘允、野本寛一、渡辺公三、真野俊和、新谷尚紀、倉石忠彦、池上良正、大塚和夫、渡邊欣雄、三尾裕子などがいる。

内容は、当初は宗教学や宗教民俗学が主体であったが、次第に宗教人類学に展開した。有賀喜左衛門による家族・村落研究、中井信彦による社会史や柳田國男論も影響を与えた。この大学院の特色は、以上の成り立ちからもわかるように、文化人類学と民俗学を融合していることにある。研究地域はアジアが多く、OB を含めると、朝鮮、中国、韓国、ベトナム、タイ、フィリピン、スリランカ、インド、バングラデシュ、ネパール、パーキスタン、インドネシアなどであるが、アフリカでもカメルーン、ガーナ、ベナン、コートディボワール、ナイジェリア、ケニア、ウガンダ、スーダンに関する研究者がいる。その他として、ミクロネシア、北アメリカ南部、中南米のハイチ、ブラジル、ボリビア、グァテマラ、メキシコの研究者も輩出している。日本研究は民俗学だけでなく、文化人類学の手法を取り込んでいる点に特色がある。民俗学や芸能史と接合して祭祀芸能の研究を行う者や、修験道を主体とする日本の民俗宗教の研究、あるいは海外の民俗宗教、特に東アジアや南アジアとの比較が試みられ、新宗教やスピリチュアリテイ研究も展開している。論文集としては、『哲学』第 107 集[特集：文化人類学の現代的課題]（三田哲学会、2002）と『哲学』119 集[特集：文化人類学の現代的課題Ⅱ]（三田哲学会、2008）があり、『人間と社会の探求―慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要―』にも多くの論文が掲載されている。

民俗調査の成果は、『修験集落八菅山』（愛川町、1978）、『修験者と地域社会―新潟県南魚沼の修験道―』（名著出版、1981）、『伝統的宗教の再生―解脱会の思想と行動』（名著出版、1983）、『山の祭りと芸能』上・下（平河出版社、1984）、『コスモスと社会―宗教人類学の諸相―』（慶應通信、1988）、『奄美伝統文化の変容過程』（国書刊行会、1989）、『宮古市史・民俗編』上・下（宮古市、1995）、『憑依と呪いのエスノグラフィー』（岩田書院、2001）、『鳥海山麓　遊佐の民俗』上・下（遊佐町教育委員会、2006）等で、各地の市町村史の編纂に携わる中で調査方法を覚えるというやり方をとっている。最近では、2003 年度から 3 年にわたり山形県遊佐町の民俗調査を神田より子の指導で行い、多くの大学院生と OB が参加した。科学研究費補助金・基盤研究Ｃ「空間の表象に関する宗教民俗学的研究」（2006 年 4 月～2008 年 3 月）で、OB 中心の調査を行い、『哲学』119 集（三田哲学会、2008）の中に「空間の表象」として成果がまとまっている。2008 年度からは基盤研究Ｃ「道の宗教性と文化的景観」（2008 年 4 月～2011 年 3 月）による新しい研究が開始される。また、福岡県篠栗町では、フランス国立極東学院と

の共同研究「日本の民俗社会におけるウチとソトの力学」（代表者：アンヌ・ブッシイ）を推進し、鈴木・中山・神田などは、巡礼・巫女・修験・祭礼などをテーマにして調査を継続中で、2011 年まで続く予定である。

修了後の進路としては、多数の者が大学や研究機関で職を得ている。その状況は宮家準編『民俗宗教の地平』（春秋社、1999）で把握できる。主な就職先は、東京大学、東京外国語大学、東京都立大学（首都大学東京）、お茶の水女子大学、信州大学、埼玉大学、広島大学、名古屋大学、京都大学、徳島大学、弘前大学、長崎大学、国立歴史民俗博物館、東北学院大学、四国学院大学、中部大学、神戸大学、福岡大学、広島修道大学、関西学院大学、専修大学、駒澤大学、近畿大学、神奈川大学、日本女子大学、江戸川大学、敬和学園大学、常盤大学、明星大学、大東文化大学、大妻女子大学、杏林大学、共立女子大学、高崎経済大学、神奈川工科大学、日本橋学館大学、武蔵野美術大学、国士舘大学、東横学園短期大学、萩国際大学、鹿児島女子大学、名古屋商科大学、高千穂大学、北海道東海大学、小松短期大学、金沢星陵大学、埼玉県立大学等である。但し、今後もこの傾向が続くかどうかは確証できない。

なお、大学院の文学研究科は主に東洋史、民族学考古学、国文学などの専攻から学生を受け入れ、外部からの受け入れも多い。文化人類学の専攻者の所属は史学専攻となる。現在の担当者として、吉原和男（東洋史特殊講義）と坂本勉（東洋史特殊講義演習）がおり、国文学専攻に野村伸一（芸能史）がいる。過去には松本信廣、伊藤清司、可児弘明、岩田慶治、大林太良、石川栄吉、高橋統一、野口武徳などが担当した。奄美の民俗調査を実習として行ったこともある。社会学研究科と比べると、就職者は多いとは言えないが、鈴木正崇は東洋史の博士課程終了後に、東京工業大学を経て、社会学専攻の専任者となった。

社会学研究科と文学研究科との交流は、大学院生の間では、民族学・考古学、東洋史、日本史、国文学専攻との交流がある。広く文化人類学に興味を持つ者の集まりとして、慶應義塾大学人類学研究会があり、研究会や講演会を適宜行なっている。民俗学の研究会である木曜会（櫻井徳太郎や宮田登等が創始し事務を引き継いだ）では他大学の院生などとの交流を進めてきた。

３．研究所における文化人類学の位置付け

（１）東アジア研究所 http://www.kieas.keio.ac.jp/

学部を越えた共同研究の拠点として、1984 年 4 月に設立された地域研究センターが、国際シンポジウムや公開講演会、ワークショップや地域研究講座を主催し、文化人類学に関わる研究も多数進められてきた。初代所長は小田英郎（アフリカ研究）で、以後は山田辰雄（中国研究）、小此木政夫（朝鮮研究）、国分良成（中国研究）が所長を務めた。2003 年 10 月 1 日に慶應義塾大学東アジア研究所に名称を変更して、国分良成が初代所長を務め、現在の所長は添谷芳秀（東アジア研究）である。2005 年には、国際シンポジウムとして、『日中関係の再構築へ向けて―課題と提言』（2005 年 1 月）、『日露戦争開戦 100 年』（2005 年 5 月）が行われた。隔年ごとに東アジア研究講座を開催し、2004 年の講演記録は国分良成編『世界のなかの東

アジア』（慶應義塾大学出版会、2006）、2006 年の講演記録は鈴木正崇編『東アジアの近代と日本』（慶應義塾大学出版会、2007）として刊行された。2008 年度は「東アジアの民衆文化と祝祭空間」を主題に全 14 回の講演（春学期 8 回、秋学期 6 回）が行われ、2009 年度に論集として刊行する予定である。2007 年から現代中国研究センター、2009 年からは現代韓国研究センターを下部組織として発足させて、東アジア研究の拠点になることを目指している。

人類学関係の主な成果としては、近森正『クック諸島の研究―人間と先史社会―』（慶應通信、1991）、可児弘明『香港および香港問題の研究』（東方書店、1991）、可児弘明編『華南―華人・華僑の故郷―』（地域研究センター、発売：慶應通信、1992。『僑郷　華南―華僑・華人研究の現在―』行路社、1996 として再刊）、地域研究センター編『民族・宗教・国家』（慶應通信、1994）、宮家準・鈴木正崇編『東アジアのシャーマニズムと民俗』（勁草書房、1994）、柳田利夫編『アメリカの日系人』（同文館、1995）、鈴木正崇・金子量重・坂田貞二編『ラーマーヤナの宇宙―伝承と民族造形―』（春秋社、1998）、可児弘明・国分良成・関根政美・鈴木正崇編『民族で読む中国』（朝日新聞社、1998）、鈴木正崇・野村伸一編『仮面と巫俗の研究―日本と韓国―』（第一書房、1999）、吉原和男・鈴木正崇・末成道男編『<血縁>の再構築―東アジアにおける父系出自と同姓結合―』（風響社、2000）、山本英史編『伝統中国の地域像』（慶應義塾大学出版会、2000）、吉原和男・鈴木正崇編『拡大する中国世界と文化創造―アジア太平洋の底流―』（弘文堂、2002）、野村伸一編『東アジアの女神信仰と女性生活』（慶應義塾大学出版会、2004）、野村伸一編『東アジアの祭祀伝承と女性救済―目連救母と芸能の諸相―』（風響社、2007）、The Chinese Expansion and the World Today,Center for Area Studies,1996 がある。2006 年 4 月から 2008 年 3 月までの研究プロジェクト「東アジアにおける宗教文化の再構築」（代表者：鈴木正崇）ではシンポジウムを 2 回、研究会を 14 回開催し、成果を『宗教文化の再構築―東アジアと東南アジアの動態―』（風響社、2009）として刊行する予定である。

定期的に発行している CAS ニューズレター（1 号～122 号）には、研究会の報告、各地の調査報告、文献紹介が掲載されている。2003 年 10 月以降は『慶應義塾大学東アジア研究所ニューズレター』と改称して発行されている。

（2）言語文化研究所 http://www.icl.keio.ac.jp/

言語と歴史の研究を行う言語文化研究所は、前身を「慶應義塾大学語学研究所」と言い、西脇順三郎が首唱して、1942 年（昭和 17 年）に設立された。1962 年に改組し、初代所長は松本信廣、専任の教授は井筒俊彦（イスラーム学）と辻直四郎（インド学）であったが、次第に専任者も増えて現在に至る。国際的にも注目を浴び、成果は紀要をはじめ、研究所の刊行物として公刊され、言語学コロキアムなど公開講座も行なっている。語学の講座として、古典語としてギリシャ語とラテン語、アラビア語・トルコ語・ペルシャ語などイスラーム圏の言語、タイ語・カンボジア語・ベトナム語・インドネシア語などの東南アジアの諸言語、サンスクリッ

ト語、朝鮮語、最近ではヘブライ語も開設された。井筒俊彦や前嶋信次などのイスラーム研究と松本信廣のインドシナ研究を母体とし、アラビアの宗教や言語の研究の黒田壽郎や牧野信也、ベトナムや中国の歴史研究の川本邦衛や竹田龍児、言語社会学の鈴木孝夫、インド洋・アラビア海の海洋貿易研究の家島彦一などの研究者を輩出し、現在では嶋尾稔がベトナムの近代史研究や現地調査を行なっている。刊行物には井筒俊彦の英文著作やベトナムの歴史史料の翻刻があるが、人類学関係では Matsumoto,N and Mabuchi,T(eds.),Folk Religion and the Worldview in the Southwestern Pacific1968 が重要で、1966 年に開催された The Eleventh Pacific Science Congress に提出された報告を松本信廣と馬渕東一が編集した民俗宗教と世界観に関する論文集で、綾部恒雄、岩田慶治、Jan van Baal,Lorenz G,Löffler,Georges Condominas,William A.Lessa,Josef Kreiner などの論文を掲載する。特に馬渕東一の論文「琉球世界観の再構成を目指して」は日本の人類学に初めて象徴論を導入した論文である（邦訳は『馬渕東一著作集』第３巻、社会思想社、1974、所収）。なお、本研究所には柳田文庫があり、1944 年 5 月に柳田國男が寄贈した本とノート及び西脇順三郎に柳田が個人的に恵贈した書物が保存されている。主に方言と民俗に関する文献とノートである。

（３）アート・センターhttp://www.art-c.keio.ac.jp/

アート・センターは、1993 年に開設され、現代社会における芸術活動の役割をめぐって、理論研究と実践活動をひろく展開している。毎年１回はアジアに関する催し物を企画し、文化人類学関係では、宮坂敬造が企画して、「西ジャワの伝統音楽を聴く・語る」（インドネシアのトゥンバン・スンダ）1997、「済州島の民俗芸能を見る・語る」1998、「蔵族（チベット族）民俗芸能の夕べ」1999 を開催した。

（４）斯道文庫 http://www.sido.keio.ac.jp/

斯道文庫は国文学や書誌学の研究所であるが、かつては松本隆信が中世の本地物や御伽草子の研究を精力的に進めた。所蔵史料も豊富で神仏習合や民俗社会のあり方を知る上で欠かせない。奈良絵本や寺社縁起の古いものなども所蔵している。その伝統は現在でも国文学の石川透の奈良絵本や絵巻物の研究に受け継がれ、世界各地の美術館を調査した成果の一部はデジタル・アーカイブとしてウエッブ上で公開されている。小松和彦（国際日本文化研究センター教授）もここで中世の知識を身につけて文化人類学的に絵巻物を読み説く方法を身につけた。現在の専任者のうち大沼晴暉は、国文学専攻に出講して、近世の民間医療、旅日記、民間信仰などの庶民史料を読みこなして、歴史学と民俗学を結合させる試みを行っている。大沼は日本常民文化研究所とも関係があった。大沼と交流があった神野善治は経済学部卒業後、日本常民文化研究所や日本観光文化研究所で宮本常一に民俗学の手ほどきを受け、沼津民俗資料館、文化庁を経て、現在は武蔵野美術大学に所属している。物質文化や民間信仰の研究で知られている。

（５）日本常民文化研究所との関係

日本民俗学の研究拠点の一つであった日本常民文化研究所は慶應義塾の西方の旧澁澤邸にあった（芝区三田綱町十番地）。研究所の前身は漁業史や民俗の研究のパイオニアであった澁澤敬三（1986－1963）が 1921 年（大正 10）に自宅を開放して始めたアチック・ミューゼアム・ソサエティであり、民具の収集・分類、古文書の収集・整理、漁業史研究など広い視野から民俗学の研究を推進してきた。澁澤は 1930 年（昭和 5）4 月にアチックの建物を新築した際に「新室（にいむろ）ほかひ」の意味を兼ねて、奥三河の北設楽郡本郷町中在家（なかんぜき）の人々を自宅に招いて徹夜の花祭を開催した。この催事は折口信夫の『古代研究』（1929）や早川孝太郎の『花祭』（1930）の刊行と相俟って民俗学の隆盛への動きを作り出した。松平斉光もこの時の感動が研究の契機となって、『祭』（1943）と『祭―本質と諸相―』（1946）を著したという。澁澤は研究者のために資金を工面し調査研究に多大な援助を与えた。

1934 年（昭和 9）に創設された日本民族学会は事務所を当初は本郷和田ビルに置いたが、1935 年に三田のアチック・ミューゼアムに移動し、1937 年に保谷に建てられたミューゼアムの附属研究所に移るまで三田を研究拠点とした。日本民族学会は 1936 年に日本人類学会と第 1 回連合大会を行い、1939 年には第 4 回連合大会を慶應義塾大学で開催している。生業研究を主体に独自の民俗学を構築した宮本常一や漁民研究で知られる河岡武春はアチック・ミューゼアムを拠点として活動した。1942 年には日本常民文化研究所と改称され、戦後の 1950 年に財団法人となって理事長に桜田勝徳が就任した。桜田勝徳（1903－1977）は漁業民俗の研究を推進した民俗学者で、慶應義塾大学史学科在学中に聴講した柳田國男の「民間伝承」の講義に心酔して、卒業後も柳田に師事し、朝日新聞社で『明治大正史世相篇』（1931）の刊行を手伝った。1935 年にアチックに入所し、早川孝太郎、宮本常一らと親交を重ね、戦後は日本常民文化研究所を経て水産庁水産資料室長を務め、白梅短期大学教授として教鞭をとった。主な著書に『漁業民俗誌』（1934）、『美濃徳山村民俗誌』（1951）、『海の宗教』（1970）があり、『桜田勝徳著作集』全５巻（名著出版、1980－1981）も刊行された。桜田勝徳は漁業史研究で知られる羽原又吉と親交があり、鵜飼や華僑・華人研究を行った東洋史の可児弘明とも交流があった。羽原又吉（はばらゆうきち）（1882－1969）は水産講習所教授を経て 1942 年に慶應義塾大学経済学部講師となり日本で最初の漁業経済史の講座を担当した。1950 年に慶應義塾から学位を受け、「日本漁業経済史の研究」で 1950 年度朝日文化賞、1951 年日本常民文化研究所常務理事となり、1955 年に第 45 回日本学士院賞を受けた。著作に『日本古代漁業経済史』（1949）、『日本漁業経済史』全４巻（1952－1955）、『日本近代漁業経済史』全２巻（1957）、『漂海民』（1963）がある。羽原氏所蔵の水産関係資料は「羽原文庫」として東京水産大学（現在の東京海洋大学）に収められ、澁澤敬三の「祭魚洞文庫」に次ぐ水産経済学のコレクションである。慶應義塾との関係では日本経済史が専門で江戸時代の人口研究で知られる速水融（経済学部名誉教授）が所員を務めた（後に国際日本文化研究センターに転出）。日本常民文化研究所では民俗学に止まらず、物質文化の研究、日本経済史との連携などによって幅広い調査研究が展開した。

その後、澁澤邸はマンションに立て替えられたが（1972）、日本常民文化研究所はその一室で活動を続け、日本民具学会の事務局として『民具マンスリー』の発刊にあたった。1982 年に研究所は解散して神奈川大学に移転し、大学附属の日本常民文化研究所になり、河岡武春が経済学部教授に就任して所員として活躍した。大学院では民俗学を専門とする研究コースも設置された。日本常民文化研究所は慶應義塾に移譲される計画もあったが、実現には至らなかった。神奈川大学への移転後は、マンションの一室は日本民俗学会の事務局となった（1998 年まで）。その後は日本民族学会が保谷から移転して入居し、2004 年 4 月 1 日付けで日本文化人類学会に改称して、現在も事務局として継続使用している。澁澤敬三は 1945 年から 1949 年までの戦後の困難な時期に日本民族学会の会長を務めて学会の立て直しを図った。日本文化人類学会では澁澤敬三の民族学（文化人類学）への多大な貢献を顕彰して、毎年若手研究者の優れた業績に対して澁澤賞を授与しており、多くの有力研究者が受賞の栄誉に輝いている。

４．今後の展望

慶應義塾における文化人類学や民俗学の研究は特定の専攻で行われてきたわけではなく、緩やかな相互連携のもとで自由に進められてきた。人間の研究という人類学や民俗学は限りなく研究領域を拡散していく傾向があり、常に自己の立ち位置を確認し、時代の状況に応じて主題を新たに発見しつつ変幻自在に生き延びてきた。大学や研究機関でも、個々の研究者の個性を十分に発揮するという形で、研究と教育が進められてきた。しかし、隣接諸学問分野と人類学の差異性がやや薄れかけている現在、今後はある程度の組織化や連携は必要であろう。フィールドワークを基盤に据えるといってもそれはあくまで方法であって、人類学だけの専売特許とはいえない。地域研究に埋没することは、他の分野の研究者との接点を失わせることにも繋がる。また、1980 年代の表象の危機以降、果たして人類学者の調査は信頼できるのか、異文化理解など本当にできるのか、記述そのものが特定の立場の表明ではないかなど、根源的な問いが突きつけられるようになった。かつての人類学が得意としてきた異文化研究が次第にネイティブ人類学として、自社会の研究に向かう傾向があり、方法論が多様化して人類学のオリジナリティが喪失してきている兆候もある。自省的に学問のあり方を問い直し、過去との連続性や伝統の良さを受け継ぎながら、新たな成果を生み出していく組織への再編や、研究主題の絶えざる検討が要請されている。

【参考文献】

池田弥三郎編，『三田の折口信夫』慶應義塾大学国文学研究会，1973 年.
『財団法人民族学振興会　五十年の歩み―日本民族学集団略史―』民族学振興会，1984 年.
松本信廣，『松本信廣身辺雑記』私家版（発行人：松本千枝），1982 年.

（すずき　まさたか　慶應義塾大学文学部）